

メタスーパーヴィジョン (MSV)

—MSV 実施レポート—

Meta Supervision (MSV)

— MSV Practice Case Study —

(Practice report)

2026 年 9 月 15 日

インテグラルキャリア研究所

〔1.2.0 版〕

要旨

本稿は、キャリア支援者のトレーニングにおいて、約 40 分のロールプレイ、その録画から作成した逐語記録、約 40 分のスーパーヴィジョン（以下、SV）、さらに参加者全員によるメタスーパーヴィジョン（以下、MSV）を連続して実施した事例である。

相談者役 A は組織から突然役割変更を告げられた。（キャリア）コンサルタント役 B は、A に、怒りの感情と喪失感を安全に語れる場を提供したが、感情を受け止めた後、事実の確認、経験の再評価、可能性の探索、意思決定へ進むことに躊躇したケースである。

SV では、C（スーパーヴァイザー）が、B の「うまくできなかった」という思いを和らげた上で、B が黙っていた時間も、何もしていなかったのではなく、表情や視線によって A が話し続けられる場を保っていたという気づきを引き出した。さらに、B が A を傷つけまいとして踏み込みを控えたことと、C が B を傷つけまいとして厳しい問いを控えたことに、似た動きがあるのではないかという論点を発見している。

続く MSV では、D（MSV 進行者）が、C の SV を採点するのではなく、「C はなぜそのように考え、何を大切にしているのか」を尋ねた。A、B、C、E（オブザーバー）がそれぞれの経験を語ることで、録画や逐語だけから考えた推測が、本人たちの感覚に合うかどうか確かめつつ、学びの中心は「怒っている相談者に何と言えばよいのか」から、「相談者を傷つけないよう配慮しながらも、必要な問いを置き、感情を話した後の一歩まで支えるにはどうすればよいのか」へ広がっている。

本稿では、同じケース記録を AI に読ませた分析と、参加者が実際に対話して行った MSV との比較をした。AI は、面談・SV・MSV という三つの段階を整理し、考えられる説明や質問の候補を準備する点で役立った。一方、人による MSV では、本人がそのとき何を感じていたかを語り、問いに納得できないときは言い直し、必要なら関係を整えながら考えを深めることができた。したがって、AI は人の MSV に代わるものではない。事前整理や記録づくりを助ける道具として使い、中心には人どうしの対話を置く必要がある。

本稿の読み方

SV は「相談者への支援を、支援者と一緒に振り返る場」です。MSV は「その SV を、スーパーヴァイザー本人と一緒に振り返る場」です。本稿では、面談で何が起きたか、SV でそれをどう扱ったか、さらに MSV で SV をどう振り返ったかを、順番にたどります。

本稿の事例は、MSV トレーニングの記録を基に、教育・研究目的で再構成した複合的ケースです。匿名化処理を行い、直接逐語の引用を避け、内容は要約・統合しています。公開にあたっては、参加者による原稿確認と同意を経ています。

はじめに	1
第Ⅰ部 MSV について	1
第1章 ICI 独自の MSV の定義	1
第2章 SV と MSV の違い	2
❖ 実務上の SV と MSV の違い	2
❖ SV の中心対象	2
❖ MSV の中心対象	3
第Ⅱ部 方法とケース	3
第3章 方法	3
❖ トレーニングの全体設計	3
❖ 役割	4
❖ 使用資料	4
❖ 分析方針	4
第4章 ケースについて	4
❖ 本稿に掲載する対話場面について	4
❖ 匿名化およびケースの加工について	4
❖ ケース概要（加工後）	5
第Ⅲ部 三層の実践過程	5
第5章 第1層：ロールプレイで起きていたこと	5
❖ B（コンサルタント）がつくった安全性	5
❖ 沈黙を発話だけで評価しない	6
第6章 第2層：C（スーパーヴァイザー）による SV	7
❖ 「怒りを十分に聴けなかった」という B の振り返り	7
❖ 第2層から第3層へ——SV そのものを振り返る	9
第7章 第3層：全員による MSV	10
❖ まず C 自身の経験から SV を振り返る	10
❖ B を安心させた、その先を考える	11
❖ 「相手を守ろうとする」動きが二つの層に現れる	11
❖ A 本人の経験によって、それまでの見方を確かめ直す	12
❖ 逐語の理解は、本人との対話によって変更されうる	13
❖ 感情を聴くことから、キャリア支援の次の段階へ	14
❖ 第3層で起きたこと——一つの理解を複数の経験へ開く	14
❖ MSV に参加した人々の学び	15
第8章 MSV で何が変わったか	15
❖ B の課題を、失敗ではなく次の学びとして捉え直す	15
❖ C の SV そのものを、次の学びへ開く	16
❖ 「相手を守ろうとする」という強みを、二つの層から捉え直す	17
❖ 集団で振り返ることで、一つの見方に固定されなくなる	17
❖ 安心して問い合えること自体が、集団の学びになる	17
❖ MSV によって変わったのは「答え」ではなく、次に選べることである	18
第Ⅳ部 AI と人の比較	18
第9章 AI による MSV 分析	18

❖ AI に与えられた役割	18
❖ AI の事前の問いと、実際の人の場で起きたこと	18
❖ AI が有効だった点	19
❖ AI 分析の限界	19
第 10 章 AI による MSV と人による MSV の比較	20
❖ 入力される情報と、その場で生まれる情報	20
❖ 「何を問うか」と「いつ、どのように問うか」	20
❖ AI の見方を本人との対話で確かめる	20
❖ 関係そのものが学びである	20
❖ 倫理的責任	21
❖ 比較の要約	21
❖ 同じ場面を AI と人がどう読むか	22
第 11 章 比較から見えた MSV の本質	23
❖ AI は論点を整理し、人は対話の中で確かめる	23
❖ 人による深掘りが必要な理由	23
❖ SV の質を、一人の力量だけに任せない	23
第 V 部 実務への展開	23
第 12 章 実務での MSV 運用モデル	24
❖ 準備する	24
❖ 場の約束を共有する	24
❖ まずスーパーヴァイザーの語りを聴く	24
❖ 面談・SV・MSV の三層を往復する	24
❖ 次回に選べる関わり方を増やす	25
❖ 次の実践につないで終える	25
第 13 章 AI を組み込む場合の推奨配置	25
❖ MSV 実施前：検討材料を準備する	25
❖ MSV 実施中：その場の対話を優先する	26
❖ MSV 終了後：学びを整理して残す	26
❖ 情報の取り扱いと倫理	26
第 14 章 キャリアコンサルティングへの示唆	26
❖ 傾聴とコンサルティングを分断しない	26
❖ 「正しい問い」より、問いを選ぶ力を育てる	27
❖ 支援者の強みが盲点になることもある	27
❖ 答えを覚えるだけでなく、判断できる力を育てる	27
第 VI 部 限界・考察・結論	27
第 15 章 本ケースの限界と課題	28
第 16 章 考察	29
第 17 章 結論	29
第 VII 部 参考文献・一次資料	30

メタスーパーヴィジョン (MSV)

— MSV 実施レポート —

はじめに

対人支援者は、相談者が置かれている状況や周囲との関係に耳を傾け、抱えている心情や、これからの希望を理解しようとする。しかし、支援者が何に注目し、何を大切な問題だと考えて、どのような問いをするかは、相談者の話の内容だけで決まるものではなく、支援者自身の経験や価値観、そのときの感情や所属組織の文化も影響する。

そのため、支援者が自分自身の面談を別の専門家とともに振り返るスーパーヴィジョン（以下、SV）が重要になる。しかし、SV を行うスーパーヴァイザーもまた、完全に中立な立場ではなく、SV で何を課題として選択するのか、どのような問いや助言を行い、何を扱わないかということが、支援者への関わりに大きく影響する。

インテグラルキャリア研究所（ICI）が提唱するメタスーパーヴィジョン（以下、MSV）とは、このSV自体を振り返る取り組みである。しかしながら、SV を評価したり、その正しさを判定したりするものではない

MSV は、スーパーヴァイザーがSV で何に注目し、何を大切にし、どのように支援者の支援を助けようとしたのかを、スーパーヴァイザーとともに考える過程で、スーパーヴァイザー自身の経験、価値観、感情、専門家としての考え方も捉え直していく行為である¹⁾。

MSV を「SV のさらに上のSV」と説明すると、上位の専門家がスーパーヴァイザーを採点したり指導したりする制度だと誤解されやすいので、本稿では一つのトレーニングケースで、①面談、②その面談を振り返るSV、③そのSVを振り返るMSVで、誰の経験を中心に考えるのかがどう変わるかを順を追って具体的に示す。

第I部 MSV について

第1章 ICI 独自の MSV の定義

MSV は、スーパーヴァイザーが行ったSVを、本人とほかの参加者が一緒に振り返る方法である。扱うのは、スーパーヴァイザーが相談内容をどう理解したか、なぜそのような問いや助言、選択を行ったのか、どのような関係性や場をつくったか、自分の立場や影響力をどう使ったか、倫理上どのように判断したかであり¹⁾、それ以降のSVで、状況に応じて関わり方の視座を高め、相談者の気づきを促し、行動の選択肢を増やしていくことを目的としている。

ICI では、特にMSVにおける振り返りを「ナラティブ・リフレクション（語りの省察）」と呼んでいる。これは、客観的な出来事や失敗を時系列で報告したり、その善後策だけ取り上げることではない。経験を語ることで、改めてそのときは言葉になっていなかった感情や思い込み、大切にしていたこと、守ろうとしていたことに意識を向け、出来事の意味を捉え直していく過程である。

MSV のナラティブ・リフレクションは、次の三^{レイヤー}層で検討する。

1) 第1層：相談者と支援者の面談（いわゆる、コンサルティング面談）

相談者が何を体験しているか、また支援者はそれをどのように理解したかを、問いや応答を通じてフィードバックする。

2) 第2層：面談を扱う SV

スーパーバイザーが相談者をどう理解し、面談中に何を体験していたのかを問い、スーパーバイザーとしてどのような気づきを促したのかを振り返る。

3) 第3層：SV を扱う MSV

スーパーバイザーがスーパーバイザーをどう理解し、何を課題として設定し、どのような関係と場を作ったかを扱う。

この三つの層は、上から下を監督するための階層ではなく、面談を SV で振り返り、SV を MSV で振り返り、そこで得た気づきを次回以降の SV と面談へ戻していく循環である。つまり、MSV は監督者を増やす制度ではなく、支援の質を一人の経験や力量だけに任せないための仕組みである。

第2章 SV と MSV の違い

❖ 実務上の SV と MSV の違い

SV では、振り返りを通して支援実践を振り返り、MSV では、SV 実践そのものを振り返ることで、専門職として成長し、相談者への支援の質を高めることを目指すものである。

SV ではスーパーバイザーの、MSV ではスーパーバイザーの SV 実践そのものを振り返る

観点	SV	MSV
取り扱う対象	相談者への支援実践とスーパーバイザーの経験	スーパーバイザーが行った SV 実践
主たる対象者	スーパーバイザー (相談者は背景に存在)	スーパーバイザー (原事例とスーパーバイザーは背景)
主な問い	相談者をどう理解し、どう関わったか	なぜその見立て・問い・介入を選んだか
有効性	スーパーバイザーの面談理解と選択肢の拡大	スーパーバイザーの SV 理解の深化 と垂直的成長の促進
NG 行動	単なる事例検討に留まること	スーパーバイザーの講評に留まること、 原事例の再検討に戻ってしまうこと

❖ SV の中心対象

通常の SV では、相談者への支援実践を担うスーパーバイザーに焦点を当て、取り上げる問いは、次のようなものである。

- ・相談者に何が起きていたと理解したか。
- ・スーパーバイザーは面談中に何を感じ、何を意図して応答したか。
- ・相談者とスーパーバイザーの関係にどのような変化が生じたか。
- ・別の問いかけ、応答、情報提供、介入によって、相談者の理解や選択にどのような変化があり得たのか。
- ・倫理、安全、制度、組織条件まで考慮していたか。

❖ MSV の中心対象

MSV では、上記を背景として把握しながらも、対象の中心は、以下のようなスーパーヴァイザーの SV 実践を扱う。

- ・スーパーヴァイザーは、何を SV の中心課題として見立てたか。
- ・なぜその問いを取り上げ、その他の問いを取り上げなかったか。
- ・スーパーヴァイザーをどのような人、どのような段階にいる人として理解したか。
- ・成長や育みを支持する（nurturing）→ 方向性や方策を見定める（devising）→ 意志を固め行動に移す（commitment）→ 経験を振り返り、意味づける（narrative reflection）という一連の行動において、スーパーヴァイザー自身の感情や価値観がスーパーヴァイザーにどう影響したか¹⁾。
- ・スーパーヴァイザーの権威性は、スーパーヴァイザーの自由な語りを広げたのか、狭めたのか。
- ・SV の場が、何かを持ち帰る場として設計できていたか。

MSV は、スーパーヴァイザーが、面談のどの情報に注目し、どのように SV のテーマを決めたのかを知るために、「相談者に何が起きたていたか」だけではなく、「スーパーヴァイザーに何が起きたか」にも焦点をあわせる。元の面談に焦点を置くと、面接を扱う単なる SV となってしまう、参加者からの意見提案に留まってしまう。

第 II 部 方法とケース

第 3 章 方法

❖ トレーニングの全体設計

本事例は、MSV を学んでいる 4 名の研究員および 1 名の MSV 指導員による実践トレーニングとして行われた。

基本的な流れは次の通りである。

- ① 研究員が相談者役とコンサルタント役を担い、約 40 分のオンラインのロールプレイを行った。
ロールプレイは、ほかのメンバーも観察者（マイク / ビデオ OFF）として同席した。
- ② ロールプレイは録画・録音し、時刻情報を含む逐語記録を作成した。
- ③ 研究員がスーパーヴァイザーとなり、事前にロールプレイ録画を視聴して SV 実施計画を練った上で、コンサルタント役をスーパーヴァイザーとした約 40 分の SV を実施した。
- ④ S V に続けて、5 名全員がマイク / ビデオ ON で参加して、グループ MSV を行った。SV、MSV についても、録画・録音を行い、ロールプレイ、SV、MSV の記録を AI に提示して人による省察との差異を検討した。

この方法の利点は、同じ参加者が面談、SV、MSV の三段階を続けて経験できることである。面談を見た印象、支援者とスーパーヴァイザーの体験、MSV で理解がどう変わったかを、記憶が新しいうちに比べられる。ただし、今回は参加者どうしが以前から知り合いであることや、観察されているという意識

¹⁾ nurturing、devising、commitment、narrative reflection という用語は、ICI の 4 ライン 10 レベルモデル（NDCN モデル）に準拠している。

も影響したため、実際の相談現場とまったく同じ条件ではなかった。

❖ 役割

今回のケースは、5名の研究員が、各回役割を交替する一連のトレーニングの役割や実施スケジュールをあらかじめ確定した。

- ・A（相談者役）：相談者を演じた。MSVでは、相談者役として面談をどう経験したかを語った。
- ・B（コンサルタント／スーパーヴァイザー）：ロールプレイで（キャリア）コンサルタントを担い、SVではスーパーヴァイザーとなった。
- ・C（スーパーヴァイザー／MSV指導を受けスーパーヴァイザー）：BへのSVを行い、続くMSVでは自らのSV実践を振り返るスーパーヴァイザーとなった。
- ・D（MSV進行者）：MSVにおいて全体の対話を調整し、Cの見立て、問い、介入、関係形成を共同で探究した。今回はMSV指導員であった。
- ・E（オブザーバー）：
 いわゆるオブザーバーとして、ロールプレイ、SV、MSVを観察し、関係の反復や場の変化について気づきを促進した。

❖ 使用資料

分析には、原ロールプレイの録音・逐語、SVの録音・逐語、集合MSVの録音・自動文字起こし、各段階について作成された分析文書を用いた。AI分析は、記録された情報を基に問いを生成した。

❖ 分析方針

参加者に点数を付けたり、発達段階の評価を行わず、実際に何が起き、本人たちがどう経験し、次の実践で何を選択できたかを、ミーティングでの対話で丁寧に検討した。

- ・相談者、コンサルタント、スーパーヴァイザー、MSV進行者それぞれの語りと視点。
- ・事実、本人の発言・解釈、未確認事項の区別。
- ・技法だけでなく、感情、価値観、役割意識、専門職としての発達状況。
- ・振り返りを通して、次の実践で新たに選べるようになった関わり方。
- ・AIが提示できたことと、人の対話によって初めて生じたこと。

第4章 ケースについて

❖ 本稿に掲載する対話場面について

以下に提示する対話は、実際の録音と逐語記録を基礎にしているが、公開における匿名性を高めるため、そのまま転載せず、固有情報、口癖、言いよどみ、発話順の一部を調整し、近接する複数の発言を統合した「再構成対話」である。

再構成にあたっては、誰が何を問い、相手がどう応答し、その応答によって焦点がどのように動いたかという関係上の順序を保ちつつ、個人を識別し得る特徴的な表現、職務上の細部、私生活上の情報は削除した。したがって、以下の対話は、発言者の一語一句を引用したものではなくMSVの実務過程を読者が追体験するための教育用の記述とした。

❖ 匿名化およびケースの加工について

氏名を記号に置き換えるだけでは、十分な匿名化にならないため、出来事の組み合わせ、職位、勤続年数、異動時期、組織規模、地域、参加者同士の関係などは、学習上必要な関係構造を残しつつ、以下の情報を削除または変更した。

- ・人名、地名、組織名、業種を削除。
- ・年齢、性別、具体的な勤続年数、収入、役職名を一般化。
- ・異動時期、組織再編の理由、上司・役員との関係の変更・縮約。
- ・個々の発言が実在人物の発言として引用されないため、逐語引用を避け、複数場面を要約・統合。
- ・ケースの核心テーマを保ちつつ、教育目的に合わせて周辺事情を再構成。

原ロールプレイは、支援上の構造を検討するために複合的・教育的ケースとして提示したものであり、実在人物に関する記録ではない。これは実在する類似の状況にある相談者に対して、固定的な性格や病理として説明されるリスク、限られた情報のみで組織の意図を断定されるリスク、支援者の迷いを人格の評価へ変えてしまうリスクなど、倫理的配慮の必要性からである。

❖ ケース概要（加工後）

A（相談者役）は、ある組織で十数年にわたり、対人調整とチーム運営を含む仕事を担ってきた。組織再編に伴い、これまでと性質の異なる業務へ移る可能性を、十分な説明がないまま知らされた。役割が大きく変わるのではないか、待遇が下がるのではないか、自分が積み重ねてきた経験は評価されていないのではないかという疑念が生じた。

A は、「組織は人を大切にする」という信条を持っており、今回の内容そのものだけでなく、伝え方と意思決定の過程に強い裏切りを感じた。怒り、悔しさ、喪失感、不安、諦め、まだ何かできるかもしれないという思いが混在し、「気持ちを整理したい」と相談に来た、という設定である。

B（コンサルタント）は、A が安心して話せる穏やかな関係構築を行い、A の怒りや悔しさを否定せず、安全に長く話せる時間を保った。一方で、感情が強まる場面では、B は A の気持ちを推測して言葉にしたり、話題をこれまでの仕事や頑張りへ移したりする場面が見られた。

面談の終盤でも A は、気持ちを整理がまだついていないと語り、終了後に B は、A の怒りを十分に受け止められなかった、もっと感情を出してもらう必要があったのではないかという後悔を抱いた。

第 III 部 三層の実践過程

第 5 章 第 1 層：ロールプレイで起きていたこと

❖ B（コンサルタント）がつくった安全性

原面談の最も重要な資源は、A が強い感情を語っても関係が壊れないと感じられたことである。B は急いで結論を出さず、穏やかな表情と声、相づち、沈黙によって、A が言葉を続けられる場を保った。

逐語だけを見ると、B の応答には感情語の推測や閉じた問いが目立つ。しかし A は後の MSV で、B が理解しようとしている姿勢を終始信じることができ、怒りを出しやすかったと語っている。ここから、面談の質は発話内容だけでは評価できず、非言語的な関与や、その場で形成されていた関係を含めて理解

する必要があることが示唆された。

〔対話場面 1：業務変更の背後にある「尊重されなかった」という痛み〕

A（相談者役）：これまで担当してきた仕事から外れ、経験のない業務へ移る可能性があると言われて
ました。きちんとした説明もなく、もう決まったことのように話されたんです。

B（コンサル）：突然で、想定していなかったからでしょうか。

A：突然だったこともあります。でも、それだけではありません。これまでやってきたことは何
だったんだろうと思います。人を大事にする組織だと思っていたのに、私は大事にされてい
なかったのかもしれません。

B：長く頑張ってこられたのに、悔しいお気持ちでしょうか。

A：……そうですね。悔しい、だけでもないんです。気持ちの整理がつかなくて。

感情を「一つの名前」にまとめてしまうリスク

この場面で B は、A の経験を理解しようとして、「突然」「悔しい」という言葉を差し出している。これ
は A の感情に近づこうとする共感の試みであった。

しかし A の語りには、突然の業務変更への驚きだけでなく、組織との信頼関係が損なわれた感覚や、
これまで積み重ねてきた経験や貢献の意味が失われるような痛みも含まれていた。さらに後の振り返り
では、怒り、喪失、やりきれなさ、自信の揺れ、組織への期待、今後への不安などが重なっていたことが
語られている。

A の短い「そうですね」も、単純な同意とは限らない。後の MSV によって、そこには考えている時間
や、「少し違う」という感覚も含まれ得たことが明らかになった。

したがって、「それは悔しいのですね」と感情を一つの言葉にまとめるだけでなく、「まだうまく名前が
つかないものも含めて、もう少し聴かせてください」と、相談者自身が経験の意味を言葉にしていく余地
を残す関わりもあった。これは、相手の経験を先回りして理解したのではなく、まだ十分に捉えられて
いない部分に開かれているという意味で、アンメット共感をもった関わりといえる。

❖ 沈黙を発話だけで評価しない

逐語上では、B の沈黙は「何もしていない時間」に見える。しかし録画を見直すと、B は A から視線を
外さず、急かさずに待っており、A もその沈黙の中で話を続けている。

後の SV では、この沈黙には、「A の次の言葉を待っていた時間」と、「B 自身が適切な言葉を探してい
た時間」の両方が含まれていたことが確認された。さらに A は MSV で、B が理解しようとしていること
を感じており、この沈黙を拒絶とは受け取っていなかったと語った。

B の「悔しい」という言葉が A の経験を十分に表していたとは限らない。しかし、言葉が完全には一致
していないことと、非言語的な関わりによって安全な関係が保たれていたことは、同時に成立し得る。

したがって、この場面を「共感できた／できなかった」という二分法だけで評価すると、実際の面談で
起きていたことを捉え損なう可能性がある。

〔対話場面 2：沈黙の中で、相手を待ちながら言葉を探す〕

A（相談者役）：今回の話は、体よく外されたということなんじゃないかと思うんです。

B（コンサルタント）：……。

A：役割も下がるかもしれない。これまでの経験も、必要ないと言われたように感じます。

B：それだけ積み重ねてこられたのに……悔しいですね。

A：そうですね……。でも、まだ自分でも、何なのか分からないです。

感情を聴いた後、どのように次へ進むか

Bは当初、Aがもっと怒りを出せるようにしたかったと振り返っている。しかし後のMSVでAの経験を確認すると、Bの関わりによって、Aはすでになんかの程度まで怒りや悔しさを語ることができていた。

ここから「もっと感情を出してもらった必要があった」という課題だけではなく、むしろ、感情が十分に語られた後、そこからどのように次の支援へ進むかという課題が見えてきている。

Aには、起きた出来事をどう受け止めるか、会社から大切にされなかったという思いをどう扱うか、これまでの経験への自信をどう取り戻すか、まだ確認できていない事実をどう確かめるか、これからどのような選択ができるか、といった複数の課題が重なっていたと考えられる。

感情を十分に聴いた後には、たとえば「これから何を確かめたいですか」「これまでの経験のうち、次にも生かせるものは何ですか」「今すぐ決めずに保留することも含め、どのような道がありそうですか」といった問いによって、Aとともに次の可能性を考えていくことができた。

Bが踏み込んだ問いをためらった理由

では、なぜBは先へ進むことをためらったのだろうか。後の振り返りで、Aの強い怒りに別の問いや見方を重ねることで、対立が強まったり、Aをさらに傷つけたりすることを恐れていた可能性を語っている。これは技術の問題ではなく、相手を尊重し、言葉を慎重に扱おうとするBのインテグリティ（真摯さ）、もしくは倫理的感覚といえる。Bに必要なのは、この怖さやためらいが自分の中にあることに気づいたうえで、それでも相談者にとって必要な問いを、関係を確認めつつ選べるようになることである。

たとえば、「少し違う見方も一緒に考えてよいでしょうか」と許可を取り、Aの反応を確かめながら進めることもできる。相手への配慮と、必要なことを尋ねる姿勢は、どちらか一方を選ぶものではない。その場の関係と相談者の状態に応じて、両方を調整していくことが求められる。

第6章 第2層：C（スーパーヴァイザー）によるSV

第1層の面談を終えたBは、「Aの怒りを十分に受け止められなかった」という後悔を持ってSVに臨んだ。第2層では、このB自身の振り返りを起点として、Cとの対話を通して原面談の経験がどのように捉え直されていたのかを見る。

❖ 「怒りを十分に聴けなかった」というBの振り返り

〔対話場面3：「怒りを聴けなかった」という後悔からSVを始める〕

C（スーパーヴァイザー）：録画を何度か見直したとのことですが、今日はどの部分を一緒に考え

たいですか。

B（スーパーヴァイジー）： もっと話を聴きたかったです。A が怒っていることは分かっていたのに、その怒りを十分に出してもらえないまま終わった。それが一番の後悔です。

C： 「もっと聴きたかった」ということと、「怒りを出してもらいたかった」ということがあるのですね。今日は、その辺りを考えてみましょうか。

B： お願いします。録画を見ても、今なら何を言うかが浮かばないんです。私は怒りを扱うのが苦手なのかもしれません。

C はまず、B が今回の SV で何を扱いたいのかを確認した。B が持ち込んだのは、「A が怒っていることは分かっていたのに、その怒りを十分に出してもらえなかった」という後悔であった。

C は、B の後悔をすぐに修正したり評価したりせず、まず SV で一緒に考えるテーマとして受け止め、B は、「怒りを扱うのが苦手なのかもしれない」という自分の弱さや迷いについて向き合う気づきをもたらした。

前章で見たように、実際の面談では A が安全に感情を語り、B の沈黙や非言語的な関わりも機能していたと考えられるが、この時点ではまだ B は、原面談を「A の怒りを十分に聴けなかった面談」として捉えている。しかし、SV はまず B 自身の経験を出発点として進められた。

〔対話場面 4：相談者に合う「正解の言葉」を探し続ける〕

B： 録画を見ると、私はずっと言葉を選びながら話していたように見えます。適切な言葉が出てこなくて。

C： 言葉を慎重に選ぶことは大切です。ただ、今のお話を聴いていると、いくつかの言葉から選んでいたというより、「A に合う正解の言葉」を探していた感じでしょうか。

B： そうです。選んでいたというより、探していました。どれが A にぴったりする言葉なのか、ずっと迷っていました。

C： 言葉が見つからない間、A が話し出すのを待っていた時間と、ご自分が言葉を探していた時間の両方がありましたか。

B： はい。待てていたときもあります。でも、自分が迷子になっていた時間もあったと思います。

「何とえばよかったか」から、B 自身の経験へ

B は、うまく応答できなかった原因を、当初、A に合った言葉を選べなかったことに求めていた。これに対して C は、「言葉を選んでいた」という B の説明を、「選んでいた」を「探していた」と捉え直すことで、B の面談中の経験していたことを具体的にした。B は単に適切な言葉を知らなかったのではなく、A の気持ちにぴったり合う「正解の言葉」を自分が見つけなければならぬと感じていた。そのため、A の話を聴きながらも、自分が次に何を言うべきかへ意識が向き、言葉が見つからないほど迷いも大きくなっていったと考えられる。

ここで SV の焦点は、「あの場面で何とえばよかったのか」から、「そのとき B 自身に何が起きていたのか」へ移った。

これは重要な転換である。適切な応答例を考えるだけであれば、SV は面談技法の検討にとどまる。し

かし、なぜ B が「正解の言葉」を必要としたのかまで振り返ることで、強い感情を示す相談者を前にしたときの B の迷いや怖さ、支援者としてのあり方そのものが、次の探究の対象となった。

〔対話場面 5：「何もできなかった」という見方を開く〕

B：私が怒りを受け止めなかったので、A は分かってもらおうとして、さらに怒りを強くしたのではないかと思います。

C：その可能性はありますが、ただ、それは本人に尋ねなければ分かりません。別の可能性もありますか。B が表情や沈黙で受け止めていたからこそ、A は安心して怒りを次々に語れたとも考えられます。

B：そういう見方はしていませんでした。私は何もできなかったと思っていたので、少し救われます。

C：言葉で返せなかった部分と、言葉以外でできていた部分を、両方見てよいのではないのでしょうか。

「何もできなかった」という面談の見方が変わる

さらに C は、B が失敗と捉えていた面談に、別の可能性を示している。

B は、それまで「自分が怒りを受け止められなかったから、A の怒りがさらに強くなった」と理解していた。これに対して C は、「B が非言語的に受け止めていたからこそ、A が安心して怒りを語ることができた」という別の可能性を提示した。

これは、B の最初の見方を否定するものではなく、C 自身も「本人に尋ねなければ分からない」と気づいており、いずれにせよ A 自身に確認する必要があるとしても、これは B にとっては大きな意味があった。「何もできなかった」と考えていた自分の面談が、言葉以外でも A を支えていた可能性が加わったからである。こうして B は、自分の面談を失敗だけで捉える状態から少し離れ、できなかったことと、すでにできていたことの両方を含めて振り返ることができるようになっている。

SV によって B の振り返りはどう変わったか

SV の開始時、B は原面談を「A の怒りを十分に聴くことができなかった」という失敗として捉え、その原因を「適切な言葉を返せなかったこと」に求めていたが、C との対話を通して、その理解には二つの変化が生じた。

一つは、「適切な言葉が出なかった」という技法上の問題の背後に、A に合う「正解の言葉」を探し続けていた B 自身の経験が見えてきたこと。もう一つは、「何もできなかった」と考えていた面談にも、沈黙や表情、待つ姿勢によって A が話し続けられる関係を保っていた可能性が見えてきたことである。

したがって、この SV は、B に「次はこう言えばよい」という答えを与えたことではなく、B が自分の面談経験を一つの失敗物語だけで捉えるのではなく、あらたな意味づけを含めて振り返れるようになったことに、その意義がある。

ただし、この段階で原面談についての理解が十分であるとはいえない。A が B の沈黙を実際にどう経験していたのか、A にとって本当に「もっと怒りを出すこと」が必要だったのかは、B と C だけの対話からは確かめることができない。

❖ 第2層から第3層へ——SV そのものを振り返る

ここまで第2層では、CとのSVによってBの原面談に対する理解が広がっていく過程を見てきた。しかし、その過程をもう一段外側から見ると、今度はCがこのSVをどのように進めたのかという問いが必要になってくる。

Cは、Bの「Aの怒りを十分に聴けなかった」という持ち込みをSVの中心テーマとして受け止めた。では、C自身はなぜ、この見立てをSVの出発点として採用したのだろうか。

またCは、Bの自責を和らげるため、「非言語的にはAを受け止めていた可能性がある」という別の見方を比較的早く提示した。この関わりによってBは「少し救われた」と語っており、再び自分の実践を考えられる状態になった。一方で、Bがなぜそこまで「正解の言葉」を必要としたのか、Aを前に何を怖いと感じていたのかについては、さらに問いを重ねる余地もある。

さらに、SVによってBの面談理解は変化したものの、「次の面談ではどのような関わりを試すのか」という具体的な実践まで十分に進んだわけではない。

ここで重要なのは、これらをCのSVの「良かった点」「不足していた点」として評価することではなく、Cは何を見て、何を大切に、なぜその問いや介入を選んだのか。そして、その選択によってBに何が起きたのか。

この問いを扱うためには、原面談についてBを振り返るだけでは足りない。今度は、CによるSV実践そのものを振り返りの対象とする必要がある。

第7章 第3層：全員によるMSV

第2層のSVでは、Cとの対話によって、Bは「Aの怒りを十分に受け止められなかった」「自分は何もできなかった」という原面談の捉え方から少し離れ、非言語的な関わりによってAが安心して話せていた可能性にも目を向けるようになった。

第3層のMSVでは、さらにそのSV自体を振り返りの対象とした。中心となるのは、CがBをどのように理解し、何を大切に、なぜその問いや介入を選んだのかである。そこにA、B、Eそれぞれの経験を重ねることで、第1層、第2層で形成されてきた理解をもう一度振り返る。

❖ まずC自身の経験からSVを振り返る

D (MSV 進行者) は、最初からCのSVを評価したり改善点を指摘したりするのではなく、まず、ロールプレイを見て何を扱おうと考えていたのか、実際のSVで何ができ、何が十分ではなかったと感じているのかをC自身に尋ねた。

〔対話場面6：MSVの開始—スーパーヴァイザーの内側から語ってもらう〕

D (MSV 進行者)：まずCさんに伺います。ロールプレイを見た段階で、何を扱いたいと考えていましたか。そして、実際のSVでできたこと、できなかったことは何でしょう。

C (スーパーヴァイザー)：Aさんは終盤にも「気持ちの整理がつかない」と話していたので、その整理がどうなったのかを扱いたいと思っていました。また、BがAの感情を「悔しい」など自分の言葉へ翻訳していた点も気になっていました。ただ私は、一回のSVで何か答えまで持つ

ていきたい癖があります。今回は B 自身に話してもらうことを優先したつもりですが、十分できたかという、半分を少し超える程度だと思います。

D：点数はいったん横に置きましょう。C さんにとって、B さんはどのような支援者ですか。

C：相談に来る人をととても大切にします。面談後に、その人が自分の力で進めるようになってほしいと考えている人だと思います。

D：その B さんへ、スーパーヴァイザーとして、どのような手を差し伸べようと思いましたか。

C が自分の SV を点数で評価しようとしたのに対し、D はその評価を掘り下げず、「B をどのような支援者として理解していたのか」「その B に何をしようとしたのか」へ問いを移した。

これによって、MSV の焦点は「C の SV は何点だったのか」ではなく、C は何を見て、何を大切に、B の学びをどのように支えようとしていたのかへ移った。

前章では B が自分の面談経験を語ることから SV が始まった。同様に、C が自分の SV 経験を語ることから MSV が始まっている。

❖ B を安心させた、その先を考える

SV において、C は「何もできなかった」と自責していた B に、非言語的には A を十分に支えていた可能性を示し、B はそれを「認められ、救われた」と受け取った。MSV では、この関わりの意義を認めたうえで、さらに「その安心の後に、B の学びをどこへ進めることができたのか」が問われた。

〔対話場面 7：「理解された」の次を問う〕

D：「B さんは、A さんの思いや苦しさを理解し、“できている部分もあります”」と返した C さんの応答を B さんは、どう受け取りましたか。

B：全くできていなかったと思っていたので、認めてもらえて救われました。

D：その安心は大切です。では、救われて終わるのではなく、次の面談を変えるために、B さんは何に気づく必要がありましたか。

B：強い感情の人に、どう返すかを練習する必要があると思いました。

D：「怒りが苦手」とは、具体的には何が起きることですか。怒りを否定したくなるのか、怖くなるのか、静めたくなるのか。

B：私の中で、怒りには少し悪いイメージがあります。爆発するのが怖くて、無意識に弱めたり、収めたりしようとしたのだと思います。

ここで D は、C が B を安心させたことを否定していない。むしろ、その安心を土台として、B に対してさらに自分の経験を振り返れるように問いを進めている。

その結果、「怒りにどう返せばいいか」という技法上の問題から、B は怒りの近くにいるとき何を恐れ、なぜ踏み込みにくくなるのかという問いが現れた。B 自身も、怒りの爆発や対立への怖さがあり、無意識に感情を弱めたり収めたりしようとしていた可能性を語り、B 自身の経験が、MSV の対話によってさらに具体的になったのである。

❖ 「相手を守ろうとする」動きが二つの層に現れる

ここで、BがAの強い感情へ踏み込みきれなかった背景には、Aを傷つけない、関係を壊したくないという思いがある一方で、CがBの自責を比較的早く和らげ、できていたことを伝えた背景にも、Bを守り、安心して振り返れる状態にしたいという思いがあったという、面談とSVの間に似た関係が見られるのではないかとE（オブザーバー）が指摘しており、Bの経験、Eの観察、そしてC自身の振り返りを重ねることで、検討可能な仮説となった。

〔対話場面 8：層をまたいで現れた似た関係の動き〕

D：Bさんは、Aの怒りを受け取っていなかったというより、受け取った後でどうしていたのでしょうか。

B：自分の感情を重ねて、少し沈静させようとしたのだと思います。怒りをそのまま扱わず、薄めようとしたというか。

D：比喩的に言えば、蓋をするような動きでしょうか。ただし、良い悪いではなく、なぜ蓋をする必要があったのかを考えたいのです。

E（オブザーバー）：今の話を聴いていて、CさんもBさんをとて守ろうとしていたように感じました。BさんがAさんの痛いところへ入るのをためらったように、CさんもBさんの怖さへ触れるとき、慎重に言葉を選んでいたのではないのでしょうか。

C：関係性があるから踏み込んでも修復できる、とBさんには伝えました。でも、その場にいる人には、「この言葉を言ったらどうなるだろう」という怖さがある。私自身にも、その迷いがあったのだと思います。

ここで出てきたのは、BとCの性格が同じだということではない。むしろ、「相手を大切にしたい」「傷つけない」という強みが、異なる二つの層で、必要な問いをためらわせる方向にも働いた可能性である。

MSVでは、この強みを取り除こうとするのではない。相手を守ろうとする姿勢がいつ支えとなり、いつ別の関わりを選びにくくするかを知ることで、次の実践で選べる関わり方を増やす。

❖ A 本人の経験によって、それまでの見方を確かめ直す

ここまで、原面談についてはBの振り返りとCの見立てを中心に検討してきた。しかし、「Bの沈黙はAにどう届いていたのか」「Aにはもっと怒りを出してもらう必要があったのか」は、A本人の経験を聴かなければ確かめることができない。MSVではAにも原面談をどのように経験していたのかを尋ねた。

〔対話場面 9：相談者役が、支援の効果を語り直す〕

D：Aさんは、Bさんの面談をどのように経験していましたか。

A（相談者役）：Bさんが分かろうとしてくれていることは、ずっと信じていました。もし全く違うと感じていたら、早い段階で「そうではない」と言っていたと思います。Bさんだったから、怒りも出しやすかったです。

B：怒りを受け止められなかったと思っていたので、そう言ってもらえるのはありがたいです。

A：ただ、私の中にあったのは怒りだけではありません。悔しさも、やりきれなさも、先への不安もありました。たとえ全部出してすっきりしても、その後で「では、どうしよう」となったと思います。

D：感情が出た後に、Aさんがこれまでしてきたことや、まだ見えていない可能性へと進む支援が必要だったということですね。

A：はい。自分だけが取り残されたのではないか、これから別の形で経験を使えるのではないか、そういう視点が少しあれば、気持ちが動いたかもしれません。

Aの語りによって、それまでの理解は一部確かめられ、一部修正された。

まず、Bが「十分にできなかった」と考えていた傾聴や沈黙は、Aには拒絶ではなく、「分かろうとしてくれている」関わりとして経験されていた。したがって、Bの非言語的な関係形成がAの安全感を支えていたというCの見立てには、A自身の経験からも裏づけが得られた。

一方、「Aにはもっと怒りを出してもらう必要があった」というBの当初の理解は修正を必要とした。Aが求めていたのは、感情をさらに引き出してもらうことではなかった。十分に語った後に、自分の経験をどう捉え、これから何を確かめ、どのような可能性があるのかを一緒に考えることでもあった。

これによってBの次の課題は、「もっと感情を聴くこと」から、「感情を十分に受け止めた後、どのように次の支援へ進むか」へと具体化された。

❖ 逐語の理解は、本人との対話によって変更されうる

A 本人の参加によって捉え直されたのは、面談全体の意味だけではない。逐語に繰り返し現れていた「そうですね」という短い応答についても、Bが考えていたものとは異なる可能性が明らかになった。

〔対話場面 10：「そうですね」を一つの意味に固定しない〕

E：逐語を見ると、Aさんの「そうですね」が何度も出てきます。Bさんは、納得していないサインとして受け取っていたようですが、考えながら話している「そうですね」もあったのではないのでしょうか。

B：逐語で繰り返し見ると、全部が否定的な反応に見えてしまいました。

A：私の「そうですね」には、いくつかあります。本当にそうだったとき、少し違うと思ったとき、自分の伝え方がうまくないのか考えているときもあります。

D：同じ言葉でも意味は一つではない。分からなければ、その場で「今の『そうですね』は、どのような感じですか」と尋ねてもよいわけですね。

A：はい。私にも分からなければ、「まだ分かりません」と答えられます。

このやり取りは、逐語の価値と限界を示している。逐語によって繰り返される言葉を発見することはできるが、その意味まで文字だけから確定することはできない。

重要なのは、逐語から意味を言い当てることなく、逐語から生まれた疑問を、本人との対話へ戻すことである。同じ「そうですね」であっても、納得、違和感、内省、迷いなど複数の経験があり得る。分からなければ、その場で確かめるという選択肢もある。

❖ 感情を聴くことから、キャリア支援の次の段階へ

A の語りを受け、MSV ではさらに、「感情を十分に語った後、どのような支援が必要だったのか」が検討された。

〔対話場面 11：「怒りを出した後」を問うことで、キャリア支援へ戻る〕

D：A さんが怒りを十分に語ったとします。その後、B さんは何をやる予定でしたか。

B：さらに話してもらえば、整理したいことや思い込みが見えてくると思っていました。でも、何が出てきたら、そこからどうするかまでは考えていませんでした。

C：感情を聴いた後、これまでの経験や強みを振り返り、組織から説明されている事実と、A さんが予測していることを分けることも考えられます。

D：「これはよい機会だ」と支援者が決めるのではなく、排除された可能性も、期待されている可能性も、まだ分からないこととして並べる。そのうえで、A さんが何を確認し、どう選ぶかを支えるということですね。

B：私には、「その先」を考える視点が不足していたのだと思います。聴いて元気になってもらうところから、相談者が私の手を離れて動けるところまでを考えたいです。

この対話は、「もっと深く聴く」とは、感情だけを際限なく掘り下げることではないことを示唆している。相談者が何を大切にしているのか、現実になんを確認する必要があるのか、これまでの経験の何が力になるのか、これからどのような道を選ぶのかへ進むことも、キャリア支援における「深く聴くこと」に含まれる。

ここでいう「次へ進む」とは、相談者を早く行動させたり、出来事を肯定的に捉え直させたりすることではない。

A の状況には、「会社から外された」という理解だけでなく、「新しい役割を期待された」「これまでの経験を評価された」「説明不足によって悪く受け取った」「実際に不利益な配置だった」など、複数の可能性が残されている。支援者がどれかを正解として決めるのではなく、事実と解釈を分け、A 自身が何を確認し、これまでの経験をどう捉え、これから何を選ぶのかを一緒に考える必要がある。

したがって、感情を受け止めることとキャリアについて考えることは、別々の支援ではない。安心して経験を語れる関係を土台として、その経験を捉え直し、現実に関わり始めるための選択可能性へつなげていくことが、次の支援となる。

B 自身も、「聴いて元気になってもらう」ことから、「相談者が自分の手を離れて動けるところまでを考える」ことへ、自分の支援の見方を広げている。

❖ 第 3 層で起きたこと——一つの理解を複数の経験へ開く

この MSV では、第 1 層、第 2 層で形成されてきた理解が、A、B、C、D、E それぞれの経験によって捉え直された。

B が「失敗」と考えていた沈黙は、C によって非言語的な支援として捉え直され、さらに A 本人からも、安心して話せる関係として経験されていたことが語られた。一方、「もっと怒りを聴く必要があった」と

いう B の理解は、A の語りによって、「十分に感情を語った後、次の支援へどう進むか」という課題へ修正された。

また、C が B を安心させた関わりも、単に「よい SV」として確定したわけではない。それが B の自責を和らげる重要な支援であったことを認めながらも、B の怖さへさらに踏み込む余地がなかったかという別の見方が E から示され、C 自身もそこにあった迷いを振り返った。

このように MSV では、誰か一人の見方を正解とするのではなく、「誰が、どの場面を、どのように経験していたのか」を区別しながら重ねることで、それまでの理解を確かめ、修正し、新しい問いへ開いていく。

ここに、第 1 層の面談、第 2 層の SV を経て、第 3 層として MSV を行う意味がある。

❖ MSV に参加した人々の学び

MSV の終盤では、一つの SV を振り返ることから、支援に関わる人が学び続けることそのものへと対話が広がった。

E は、人に言葉を向けることへの怖さや、学ぶほど自分の理解が浅くなったように感じる不安を語った。

D も自らの経験を限定的に開示し、そうした揺らぎを、単なる自信の喪失ではなく、言葉が相手に与える影響や、実践の複雑さが以前より見えるようになったこととして捉え直した。

C は「一つの山を登ると、また別の山が見える」という比喻を示し、A も、学ぶほど未知のものが見え、不安が増える経験について語った。

ここでは MSV は、C の SV を改善するためだけの場ではなくなっている。自分の見立てや関わりが唯一の正解ではないことを知り、それでも必要な場面では問い、判断し、実践していく。その結果をまた他者との対話に開いて振り返る。

こうした循環を通して、学ぶことによって生じる迷いや自信の揺らぎそのものも、専門職としての学びの一部として共有される場になったと考えられる。

第 8 章 MSV で何が変わったか

第 5 章から第 7 章では、一つの面談を起点として、B による面談、C による SV、そして全員による MSV という三つの層をたどってきた。その過程では、最初から一つの正しい理解があったわけではない。それぞれの立場から経験を語り、別の見方を加え、本人に確かめることで、当初の理解が少しずつ捉え直されていった。

ここでは、その結果として B と C の理解や学習課題がどのように変化したのか、さらに MSV に参加した集団にどのような学びが生まれたのかを整理する。

❖ B の課題を、失敗ではなく次の学びとして捉え直す

MSV の前、B は原面談を主として「できなかったこと」から振り返っていた。「A の怒りを十分に出してもらえなかった」「適切な言葉を見つけられなかった」という後悔が強く、自分は強い感情を扱うことが苦手なのではないかと考えていた。

しかし SV と MSV を通して、この理解は少しずつ変化している。

まず C との SV によって、B が言葉では十分に応答できなかったとしても、表情、声、沈黙、待つ姿勢などによって、A が話し続けられる関係を保っていた可能性が示された。さらに MSV で A 本人の経験を聴くと、A は実際に、B が理解しようとしていることを感じ、安心して怒りや悔しさを語ることができていたと話した。

これによって B は、「何もできなかった」という自己評価から離れ、A が感情を語るための安全な関係は、すでにつくることができていたと自分の実践を捉え直すことができた。

同時に、新しい課題も明確になった。A が必要としていたのは、さらに怒りを引き出してもらうことだけでなく、感情を十分に語った後に、起きた出来事について事実と解釈を整理し、これまでの経験を振り返り、今後に残されている可能性や選択肢を一緒に考えることでもあった。

したがって B の課題は、「怒りを十分に聴けなかった」から「感情を十分に受け止めた後、どのように次の支援へ進むか」へと具体的な課題に意味付けられた。

また B は、その先へ踏み込めなかった背景に、対立が強まることや、自分の言葉によって A を傷つけることへの怖さがあったことにも気づいた。ここで必要なのは、B の慎重さや相手への配慮をなくすことではない。たとえば「少し違う見方も一緒に考えてよいでしょうか」と許可を取り、相手の反応を確かめながら問いを置くこともできる。

つまり MSV によって B の学びは、「もっと上手な言葉を覚えること」から、「自分の怖さにも気づきながら、相談者との関係に応じて次の関わりを選べるようになること」へ広がったと考えられる。

❖ C の SV そのものを、次の学びへ開く

C については、B とは異なる変化が生じた。

C の SV は、強い自責を抱えていた B に、原面談を別の角度から見る可能性を示し、B が言葉では十分に応答できなかったとしても、非言語的には A を支えていた可能性を伝えたことで、B は「何もできなかった」という自己評価から少し離れ、再び自分の実践を振り返れるようになっていく。

MSV では、この C の関わりを「良かった SV」として評価して終えるのではなく、C はなぜそのように B を支えようとしたのかを新たな振り返りの対象としている。

たとえば、C は B が持ち込んだ「A の怒りをもっと出してもらう必要があった」という理解を、比較的早い段階で SV の中心テーマとして採用している。そこには、B の持ち込みを尊重しようとする姿勢があった一方、その前提自体をさらに問い直す余地もあった。

また C は、B が「何もできなかった」と自分を責めている状態を見て、B がすでにできていたことを伝え、安心して振り返れる状態へ戻そうとした。この関わりは実際に B を支えていた。しかし MSV では、その「B を守ろうとする」姿勢によって、B が何を怖いと感じ、なぜ必要な問いをためらったのかについて、さらに長くとどまって聴くことを難しくしていた可能性も検討された。

ここから C には、いくつかの問いが開かれた。B の持ち込みを尊重することと、その前提自体を問い直すことをどう両立するのか。B を安心させることと、必要なところへ踏み込むことをどう調整するのか。自分から別の見方を提示することと、B 自身の言葉が生まれるまで待つことをどう選ぶのか。そして、SV で得られた気づきを、次の面談で試せる具体的な関わりへどうつなげるのか、という問いである。

さらに C 自身が語った、「一回の SV で一定の答えまで持っていきたい」という傾向も、良し悪しを判断する対象ではなく、自分の SV を理解するための一つの手がかりとなった。

したがって MSV によって C に起きたことは、自分の SV の欠点を指摘されたことではない。B を支えようとして行った自分の見立てや介入にも、一定の価値観や選択があったことに気づき、それらを次の

SV で改めて選び直せるようになったことに意味がある。

❖ 「相手を守ろうとする」という強みを、二つの層から捉え直す

B と C の振り返りを重ねることで、このケースには一つの共通する動きも見えてきた。

B は A を傷つけないという思いから、強い感情の近くで問いを控えた可能性がある。一方 C も、B の自責を強めたくないという思いから、まず B を安心させる方向へ関わった。

これは、B と C に同じ問題があったという意味ではない。むしろ二人には、目の前の相手を大切にし、傷つけないよう慎重に関わろうとする強みがあつた。

MSV によって見えてきたのは、その強みが常に同じように働くわけではないということである。ある場面では相手が安心して話すための支えとなり、別の場面では必要な問いを控える方向へ働くこともある。

重要なのは、その強みを捨てることではない。自分の中で「相手を守ろうとする」動きが生じていることに気づき、今は待つのか、尋ねるのか、別の見方を提示するのかを選ぶようになることである。

この点は、第 1 層の面談と第 2 層の SV を、第 3 層の MSV で一緒に振り返ったからこそ見えてきた論点であつた。

❖ 集団で振り返ることで、一つの見方に固定されなくなる

今回の MSV では、C だけが学ぶのではなく、A、B、C、D、E それぞれの経験が、ほかの参加者の理解を捉え直す材料となった。

たとえば、B が失敗と考えていた沈黙について、C は非言語的な支援としての可能性を示し、A は実際に「理解しようとしてくれている」と感じていたことを語った。一方、A の「そうですね」という短い応答については、B が否定的な反応として捉えていたものの、A 本人からは、納得、違和感、考えている時間など、複数の意味が含まれていたことが語られた。

また、B と C の間に似た「相手を守ろうとする」動きがあるのではないかという見方は、E の観察によって持ち込まれ、C 自身の経験と照らし合わせながら検討された。

このように MSV では、一人の見立てを正解として共有するのではなく、「誰が、どの場面を、どのように経験していたのか」を重ねることで、それまでの理解を確かめたり、修正したり、新しい問いを生み出したりすることができる。

ここに、複数の参加者で SV を振り返る意味がある。

❖ 安心して問い合えること自体が、集団の学びになる

MSV のもう一つの変化は、参加者が「正しい答えを示さなければならない」という状態から少し離れ、迷いや怖さ、違和感を学びの材料として語れるようになったことである。

B は、怒りを前にした怖さを語った。C は、B へ踏み込むことへの自分自身の迷いを振り返った。E も、人に言葉を向けることへの怖さや、学ぶほど自分の理解が浅くなったように感じる不安を語った。

こうしたことを率直に扱えたのは、心理的安全性が「難しいことを尋ねないこと」として理解されていなかったからである。

MSV における心理的安全性とは、相手を傷つける可能性のある問いをすべて避けることではない。相手の尊厳と学ぶ可能性を守りながら、必要な問いを率直に扱い、問いがうまく届かなかつたり関係が揺れたりしたときには、そのこと自体を再び対話の中で扱えることである。

そのような関係があるからこそ、参加者は「分からない」「怖い」「迷っている」と語ることができる。

そして、その不確かさを隠さずに他者と検討すること自体が、次の実践へ向けた学びになる。

❖ MSV によって変わったのは「答え」ではなく、次に選べることである

今回の MSV によって、原面談や SV について唯一の正しい答えが得られたわけではない。

B は、「怒りを十分に聴けなかった」という自己評価から、すでにできていた関係形成を認識し、そのうえで「感情を聴いた後、どう次の支援へ進むか」という新しい課題を持つようになった。

C は、B を安心させた自分の関わりの意味を確認すると同時に、その支援の姿勢が、場合によってはさらに深い問いを控える方向にも働く可能性に気づいた。

そして参加者全体として、一つの出来事には立場によって異なる経験と意味があり、それらを対話の中で確かめながら理解を更新していくことを経験した。

したがって、今回の MSV で最も重要な変化は、過去の実践について「何が正しかったか」が確定したことではない。自分がなぜそのように関わったのかを以前より細かく理解し、次に似た場面に出会ったときに、以前より多くの関わり方を選べるようになったことにある。

MSV は、過去の実践を採点するためのものではなく、過去の経験を他者との対話によって捉え直し、そこで得られた理解を次の実践へ開いていくための場である。

第 IV 部 AI と人の比較

第 9 章 AI による MSV 分析²⁾

❖ AI に与えられた役割

今回、人間による MSV とは異なる視点から同一の面談・SV 過程を分析し、MSV において AI がどこまで分析的・補助的な役割を担いうるか、その可能性と限界を検証するため AI を併用した。

元の面談と SV の録音・逐語を読ませ、①面談、②SV、③MSV という三段階を分けて整理させ、相談内容をどう理解し、どのような質問や助言を選び、どんな関係をつくったかを分析させた。

AI は、C の SV について、安心して話せる場をつくったことや、B の曖昧な経験を言葉にしたこと、言葉以外の関わりにも目を向けたことなど評価すべき点を指摘できた一方、次のような課題とすべき点も指摘している。

- ・「怒りを吐き出すこと」を中心課題にした前提は妥当か。
- ・C は B を安心させるため、解釈を早く提供していないか。
- ・原面談で B が A へ意味を提供した動きと、SV で C が B へ意味を提供した動きに似た構造はないか。
- ・気づきを短い再実践へつなげる必要はないか。

❖ AI の事前の問いと、実際の人の場で起きたこと

AI が記録から生成した中心的な問いは、たとえば次のようなものであった。

AI による問いの例：

- ・C は、なぜ B の「怒りを吐き出させたい」という枠を SV の中心課題として採用したのか。

²⁾ 今回使用したのは対人支援にカスタマイズした ChatGPT で構成された AI クラーク、ミス・イーランドである。

・Bを安心させたい気持ちは、どの介入を可能にし、どの問いを置きにくくしたか。

・原面談でBがAへ意味を提供した動きと、SVでCがBへ意味を提供した動きに、似た構造はないか。

これらの問いは、実際のMSVで扱われた論点とよく重なっている。しかしAIの文章だけでは、Cが「一回で答えへ持っていきたい自分」に気づくことも、BがCの言葉に救われたと語ることも、Eが二つの層の類似を自分の言葉で指摘することも起こらない。

人のMSV：

実際の場合では同じ問いが次のような往還になっている。

D：CさんはBさんをどう理解し、何を返そうとしましたか。

C：できていないと思っているBさんに、できている部分もあると伝え、前へ進んでほしかったです。

B：その言葉で救われました。

D：救われた後、面談を変えるために、次に何へ気づく必要がありましたか。

E：CさんもBさんを守ろうとして、踏み込みを控えた部分がなかったのではないのでしょうか。

C：私にも、言葉を置いた後に何が起きるかへの怖さがあったと思います。

AIは、記録の中から主な論点を先に整理した。人のMSVでは、その論点に当事者の実際の経験や感情、反対意見、その場の関係が加わり、単なる推測が生きた学びへ変わっていく。これが、AIによる事前分析と、人が実際に対話するMSVとの大きな違いである。

❖ AIが有効だった点

しかし、AIを併用することは以下のようなメリットがあった。

- 1) 長い記録を三層に分け、誰の経験を誰が解釈しているかを整理できる。
- 2) 単一の見立てへ固定せず、複数仮説と確認質問を準備できる。
- 3) 面談とSVを並べ、関係パターンの反復候補を抽出できる。
- 4) MSV進行者が使える問いと、次回SVの実践案を短時間で作成できる。

これらは、MSV前の予習、見落としの点検、会議後の記録化に非常に有用である。特に、記録量が多い場合、AIは人が再び原資料へ戻るための索引として機能する。

❖ AI分析の限界

AIは、記録された言語と、入力された文脈の範囲で推論する。Cが当時どのような身体感覚を持っていたか、BがCの言葉をどう受け取ったか、AがBの沈黙をどう経験したかは、本人に尋ねなければ確かめられない。

AIが示すのは、入力された記録から考えた可能性にすぎない。その見方を本人へ伝えたとき、納得するのか、違和感を持つのか、黙るのか、反論するのかを受け止め、その反応に合わせて問いを変えることは、AIには難しい。また、問いによって相手を傷つけた場合に、関係を立て直すこともできない。

ICIの公開文書も、AIは支援関係を引き受ける主体でも倫理的責任を負う専門職でもなく、その出力自体がMSVなのではないとしている。AIの応答を、人間が経験、関係、文脈に照らして採用・修正・反論・棄却する過程が重要である¹⁾。

第10章 AIによるMSVと人によるMSVの比較

❖ 入力される情報と、その場で生まれる情報

AI分析が扱えるのは、すでに録音や逐語に残っている情報である。人によるMSVでは、それに加えて、問いを受けたCがその場で語る経験、BがSVをどう受け取ったか、Aが面談をどう感じたか、Eが何に気づいたかというプロセス自体が新しい情報として加えられる。

AIは、「CがBを守ろうとして、早めに安心させたのではないか」という可能性を示すことはできるが、実際のMSVでは、Cが「一回のSVで答えに近づきたい」という自分の傾向を語り、BはCの言葉で安心できたと述べ、Eは面談とSVに似た動きがあったという指摘まではできない。

❖ 「何を問うか」と「いつ、どのように問うか」

AIは、MSVで有効と思われる問いを数多く挙げることができる。しかし、重要なのは問いの内容だけではない。同じ問いであっても、相手がまだ十分に考える準備ができていない段階で投げかければ、相手を萎縮させたり、自分を守るための説明を促したりすることがある。

人がMSVを進める場合には、相手の声の調子や間、表情、場の緊張などを感じ取りながら、まず受け止めるのか、問いを投げかけるのか、説明を加えるのか、あえて待つのかをその場で判断している。

今回Dは、まずBがAの話丁寧に聴いていたことを認めた。そのうえで、「感情を聴いた後、どのように次へ進むのか」と問いかけた。つまり、Cが大切にしていたことや、その関わりを十分に理解したうえで、その良さが、別の可能性を考えることを難しくしていなかったかを一緒に検討したのである。

このようにMSVでは、「どのような問いを立てるか」だけでなく、「いつ、どのような順序で、どの程度の強さで問いかけるか」が重要になる。相手の反応を受け取りながら、その場で問い方や進め方を調整していくことは、あらかじめAIによる質問文を用意するだけでは代替しにくい。

❖ AIの見方を本人との対話で確かめる

AIは、面談やSVの記録から、いくつもの見方や可能性を示すことができる。しかし、それらはあくまで記録から導かれた仮説であり、実際に何が起きていたのかを確かめるには、当事者との対話が必要である。

今回、AIの分析からは「BはAの怒りを十分に受け止められなかったのではないか」という可能性も考えられた。しかし、MSVでA本人の話を聴くと、Bが黙って待ってくれたことで安心して感情を話すことができたという。これによって、AIが示した見方は修正する必要があることが分かった。

一方でAは、感情を十分に話した後は、別の見方やこれからの可能性についても一緒に考えてほしかったと語った。この言葉から、Bの課題は「感情を受け止めること」そのものではなく、「十分に受け止めた後、どのように次の展開へつなげるか」にあることが、より具体的に見えてきた。

このように、AIが示す分析をそのまま答えとするのではなく、一つの仮説として本人との対話に持ち込み、本人の経験と照らし合わせながら確かめ、必要に応じて修正していくことが重要である。AIの分析と本人の語り食い違ったとき、その食い違い自体が、面談やSVをより深く理解するための新たな手がかりになる。

❖ 関係そのものが学びである

AIによるMSV相当分析では、面談やSVで生じた人間関係を記録から読み取り、その特徴や課題を分

析することができる。一方、人による MSV では、分析するだけでなく、その場で実際に生じる人との関わりそのものが学びになり得る。

たとえば、踏み込んだ問いを受けても関係が壊れないこと、自分と異なる意見を伝えても対話が続くこと、「分からない」と言っても受け止めてもらえることを、参加者は MSV の場で実際に経験する。これは、AI が「もっと踏み込んで尋ねてもよい」と分析結果として示すこととは異なる学びである。

今回 B は、MSV の中で自分自身が踏み込んだ問いを受け、それについて考えながらも、相手との関係が保たれることを経験した。これは、「必要なことを尋ねても、すぐに関係が壊れるわけではない」ということを、説明として理解するのではなく、実際の関係の中で確かめる経験になったと考えられる。

C にとっても、自分が行った SV について問いを向けられながら、良し悪しを採点されるのではなく、一緒に考えてもらうという経験があった。こうした経験は、次に C が SV を行う際の、相手への問い方や関係のつくり方にもつながり得る。

このように、AI による MSV 相当分析は「関係について分析し、学習の材料を提示する」ことができるのに対し、人による MSV では、「その関係を実際に経験しながら学ぶ」ことができる。ここに、両者の重要な違いがある。

❖ 倫理的責任

AI による MSV 相当分析では、記録をもとにさまざまな問いや解釈を示すことができる。しかし、その問いを実際に相手へ向けるかどうか、また、どのような言葉やタイミングで伝えるかについては、別の判断が必要になる。

MSV で扱われる問いには、本人がまだ十分に言葉にできていないことや、これまでの実践のあり方を問い直すものも含まれる。そのため、問いによって相手が戸惑ったり、傷ついたりする可能性もある。人による MSV では、進行者が相手の反応を見ながら問い方を調整するとともに、問いかけた後に起きたことにも応答する。問いが強すぎれば言い直し、違和感が示されれば話を聴き、必要であれば謝り、関係を修復する。

一方、AI による MSV 相当分析では、問いや解釈を提示することはできても、それを受けた本人の反応に対して、人と同じ意味で責任を引き受けることはできない。この点は、人による MSV との重要な違いである。

したがって、AI が示した発達段階、性格、病気の可能性、感情や動機などについての解釈を、そのまま本人に対する評価や判断として用いることには極めて慎重でなければならない。AI による分析は、考えられる見方や問いを増やすための材料として活用し、それをどのように扱うかについての最終的な判断と責任は、人が担う必要がある。

❖ 比較の要約

今回の比較から、AI による MSV 相当分析と人による MSV は、同じ記録を扱い、問いや見立てを生み出す点では共通しているものの、その役割には違いがあることが分かった。

AI は、大量の記録を整理し、複数の見方や問いを短時間で提示することに優れている。また、面談と SV を横断して共通するパターンを探したり、分析結果を文章として残したりすることもできる。一方、人による MSV では、参加者との対話を通して AI が示した仮説を確かめ、その場の反応に応じて問い方を変え、関係そのものを学びの機会にしていくことができる。

両者の特徴を、今回の実践に即して整理すると次のようになる。

比較の観点	AI による MSV	人による MSV
記録の整理	大量の逐語記録や資料を読み、必要な情報を整理・検索できる。	記録を参照しながら、本人が何を経験し、どのように捉えているかを対話によって確かめる。
情報の分類	事実、解釈、仮説、未確認事項などを分け、分析の構造を明確にできる。	分類された情報が実際の経験に合っているかを本人や参加者との対話から検討する。
見立てと問い	一つの出来事について複数の見立てや問い、MSV の進行案を生成できる。	どの問いを実際に扱うかを判断し、相手の状態や反応に合わせて問い方を調整する。
パターンの発見	面談と SV を横断し、似た関わり方や繰り返されている関係パターンの候補を抽出できる。	AI が示したパターンを一つの仮説として扱い、当事者の経験と照らし合わせながら意味を確かめる。
その場の情報	主として記録として与えられた情報をもとに分析する。	声の調子、間、表情、身体感覚、場の緊張や関係の変化など、その場で生じていることも扱う。
関係からの学び	人間関係の特徴や変化を分析し、学習の材料として提示できる。	MSV の場で実際に問いを受け、異なる意見を交わし、それでも関係が続くという経験そのものを学びにできる。
仮説の検証	複数の可能性を提示し、検討すべき点を明らかにできる。	スーパーヴァイザー、スーパーヴァイジー、相談者役、観察者などの語りを通して仮説を確かめ、必要に応じて修正する。
倫理的責任	問いや解釈を提示できるが、それが相手に与えた影響について人と同じ意味で責任を引き受けることはできない。	問いの強さやタイミングを調整し、異論、抵抗、傷つきなどが生じた場合には応答し、必要に応じて関係を修復する。
学びの記録・共有	分析内容や人の MSV との差異を整理し、後から検討・共有できる文章として残すことに適している。	その場で生じた気づきを本人の振り返りにつなぎ、専門職としての自己理解や次の実践の選択へ結びつける。

❖ 同じ場面を AI と人がどう読むか

AI による MSV 相当分析と人による MSV の違いを、実際の面談の一場面から検討した。

面談では、A が強い感情を語ったとき、B がしばらく沈黙する場面があった。この「沈黙」をどう理解するかについて、AI は逐語記録から、B が A の話の続きを待っていた可能性と、どのように応答すればよいか言葉を探していた可能性の両方を挙げた。しかし、記録だけではどちらであったかは判断できないため、B 本人への確認が必要であるとした。

実際の SV で B に確認すると、A が続けて話すのを待っていた時間と、自分が言葉を探していた時間の両方があったことが分かった。また C は、B が黙っていたからといって関わりが途切れていたとは限らず、表情や姿勢など、言葉以外の方法で A に関わり続けていた可能性にも目を向けた。

さらに MSV では、面談を受けた A 自身は B の沈黙を拒絶とは感じておらず、むしろ自分を理解しようとしてくれているという経験をしており、この言葉を聞いたことで、B は「自分は十分に応答できなかったのではないか」という自己評価を見直すことが可能となっている。

その一方で、A は、感情を十分に話した後は、別の見方や今後の可能性についても一緒に考えてほしかったと語った。そこで新たに見えてきたのは、B の課題は「沈黙してしまったこと」そのものではなく、A の感情を十分に受け止めた後、どのように次の支援へ進むかという点であった。

このように、AI は記録から複数の可能性を挙げ、どこを確認すべきかを示すことができるが、人による SV や MSV では、B 本人の経験に加え、C の SV での理解、A の面談での経験、さらに観察者 E の見

方を持ち寄り、AI が示した可能性も含めて確かめながら、理解を修正したり深めたりすることが可能である。

MSV の「メタ」とは、単に一段高いところから分析したり、より抽象的に考えたりすることではない。面談、SV、MSV に関わったそれぞれの人の経験や見方を重ね、「誰が、どの場面を、どのように経験していたのか」を区別しながら、出来事をより多面的に捉え直していくことである。理解を広げるための一つの視点として AI による分析は有効である。

第 11 章 比較から見えた MSV の本質

❖ AI は論点を整理し、人は対話の中で確かめる

AI は、録音や逐語に書かれた内容を整理し、見落としやすい論点や質問の候補を、地図のように示すことができる。しかし、その中からどの論点を取り上げるのか、今その質問をしてよいのか、相手が黙ったときにどう受け止めるのかは、実際の対話の中で人が判断する必要がある。

MSV の価値は、たくさんの論点を出したり、細かく分析したりすることだけにあるのではない。スーパーヴァイザーが自分の実践をほかの人に開き、その反応や異なる見方を受けながら、自分の理解や関わり方を捉え直していくことにある。AI が地図を示すことと、その地図を手がかりに、人との対話の中で実際に考え、気づきを得ていくことは同じではない。

❖ 人による深掘りが必要な理由

人による対話が必要なのは、人がいつでも AI より正しいからではない。実践者が何を意図し、何を感じ、何に迷い、相手との関係をどう受け止めていたかは、本人に尋ねて初めて確かめられる。また、問いかけられることで、それまで意識していなかった経験が初めて言葉になることもある。

AI は「C は B を守ろうとしていたのではないかと、考えるための問いを示すことはできるが、人の MSV では、その問いを受けた C の沈黙や戸惑い、納得の様子を見ながら、「誰を、どう支援しようとしたのか」「そのために何ができ、逆に何が難しくなったのか」と、さらに問いを重ねていくことができる。

「深掘り」という行為は、本人も気づいていない心理を外から言い当てることではない。対話を通して、本人が自分の経験をこれまでより細やかに振り返り、言葉にできるよう支えることである。

❖ SV の質を、一人の力量だけに任せない

スーパーヴァイザーも、学び続ける専門家である。SV の質を個人の経験や善意、権威だけに任せてしまうと、その人自身が気づきにくい考え方や関わり方が、振り返られないまま繰り返されることがある。

MSV は、スーパーヴァイザーを監査したり評価したりする場ではない。スーパーヴァイザー自身も、迷いや限界を安心して話し、ほかの人と一緒に自分の実践を振り返るための場である。こうした機会を持つことで、SV の質を「優れた一人のスーパーヴァイザーに委ねてしまう」のではなく、「SV そのものを開き、複数の人で振り返り、次の実践に生かす」という仕組みによって支えることができる。

ICI の公開資料でも、支援者を支える人をさらに支える仕組みがなければ、支援の質が個人の力量に左右されやすいことを指摘している²⁾。

第Ⅴ部 実務への展開

第12章 実務でのMSV運用モデル

ここまでの検討を踏まえ、MSVは、スーパーヴァイザーの実践を評価する場ではなく、その実践を他者との対話に開き、振り返り、次の実践につなげる場としての運用について、次のように流れをまとめる。

❖ 準備する

まず、スーパーヴァイザーが対象となるSV実践と、MSVで振り返りたいことを選ぶ。原面談やSVの録音・逐語を用いる場合は、必要な情報だけを扱い、利用目的、同意、匿名化、アクセス権、保存範囲、削除時期をあらかじめ確認する。

参加者には、MSVが原事例の解決策を考える会議ではなく、スーパーヴァイザーの実践を共同で振り返る場であることを共有しておく。

AIを併用する場合も、AIの分析をあらかじめ「正解」として提示するのではなく、スーパーヴァイザー自身の振り返りを起点とする。

❖ 場の約束を共有する

MSVを始める際には、安心して実践を開くための基本的な約束を確認する。

- ・採点や優劣の判定を目的としない。
- ・事実と解釈を区別し、断定ではなく仮説として話す。
- ・スーパーヴァイザーには、同意しない、分からない、保留する自由がある。
- ・難しい問いを避けないが、相手の尊厳と学習可能性を守る。
- ・原事例への助言に話が戻ったときは、「スーパーヴァイザーはその場面をどう見ていたのか」へ主語を戻す。

❖ まずスーパーヴァイザーの語りを聴く

最初にスーパーヴァイザー自身から、原事例の概要、スーパーヴァイザーの持ち込み、自分が設定したSVの目的、主な問いや介入、そのとき感じていたこと、今回振り返りたいことを語ってもらう。

MSV進行者は、すぐに改善案を示すのではなく、スーパーヴァイザーが自分の実践を振り返れるように問いかける。

- ・そのとき、何が起きていると感じていましたか。
- ・何を大切にして、その問いを置きましたか。
- ・スーパーヴァイザーをどのように理解していましたか。
- ・何を守ろうとしていましたか。
- ・置かなかった問いには、どのような迷いがありましたか。

❖ 面談・SV・MSVの三層を往復する

スーパーヴァイザーの語りを起点に、必要に応じて原面談やSVの具体的な場面へ戻る。

原面談へ戻るのは、相談者への「正しい対応」を決めるためではなく、スーパーヴァイザーが面談のどの情報に注目し、そこからどのような理解をつくったのかを確かめるためである。SVの場面へ戻るとき

には、スーパーヴァイザーがどう反応し、スーパーヴァイザーがその反応をどう受け取ったのかを確認する。

必要に応じて、相談者役、スーパーヴァイザー、観察者の気づきも聴く。それぞれの発言を唯一の正解とするのではなく、異なる立場から経験された一つの出来事として並べ、理解を深めていく。

❖ 次回に選べる関わり方を増やす

振り返りから見えてきたことを、次の実践へつなげる。

MSV は「次からこうすべき」という一つの正解を決める場ではない。次の SV で、状況に応じて選べる関わり方を増やすことを目指す。

- ・すぐ助言する／まず待つ。
- ・資源を伝える／自責の意味をさらに聴く。
- ・原面談の場面へ戻る／スーパーヴァイザーの身体感覚をたどる。
- ・仮説を提示する／スーパーヴァイザー自身に見立てをつくってもらう。
- ・短い再実践をする／次回まで観察課題を持つ。

どれか一つが常に正しいわけではない。スーパーヴァイザーの状態、使える時間、安全上の緊急性、SV で合意した目的、両者の関係などに応じて選択する。

❖ 次の実践につないで終える

最後に、その日の気づきを「次に何をするか」へつなげる。

- ・スーパーヴァイザーが次の SV で試す一つの行動。
- ・スーパーヴァイザーが次の面談で観察する一つのサイン。
- ・MSV 進行者が自分の進行について持ち帰る一つの問い。
- ・集団として今後も検討する未解決事項。

多くの気づきを持ち帰ることよりも、本人が選んだ小さな実践につなげることを重視する。それを次の実践で試し、再び振り返ることで、MSV を継続的な学習の循環につなげていく。

第 13 章 AI を組み込む場合の推奨配置

MSV では、スーパーヴァイザー自身の振り返りと、参加者との対話を中心に進めることが基本となる。そのうえで AI を利用する場合には、MSV の流れを置き換えるのではなく、事前準備や記録など、必要な部分を補助する形で組み込むことが望ましい。

❖ MSV 実施前：検討材料を準備する

MSV の実施前には、進行者が原面談や SV の記録を確認し、検討する材料を準備する。AI を利用する場合は、匿名化した資料を用いて、次のような点を整理することができる。

- ・三層ごとの事実と発言。
- ・まだ確認できていないこと。
- ・複数の見立てと、それとは異なる可能性。
- ・スーパーヴァイザーへ尋ね得る問い。

・原面談とSVに現れた関係パターンの候補。

ここで整理された内容は、MSVで検討するための材料であり、答えではない。参加者へ事前に共有する場合にも、「正解」ではなく「考えるための候補」であることを明確にし、スーパーヴァイザー自身の振り返りを先取りしないようにする。

❖ MSV実施中：その場の対話を優先する

MSVでは、まずスーパーヴァイザー自身の語りを聴き、そこから生まれる問いや対話を大切にする。

事前にAIで分析していた場合でも、その内容に沿ってMSVを進めたり、順番に本人へ確認したりする必要はない。対話が行き詰まったとき、見落としている点がないか確かめたいとき、別の見方を加えたときなどに、必要に応じて参照する。

事前に準備した分析よりも、その場で参加者から語られる経験や、対話の中で新たに生まれた問いを優先することが重要である。

❖ MSV終了後：学びを整理して残す

MSV終了後には、その場で得られた学びを整理し、次の実践につながる形で記録する。

AIを利用すれば、MSVで語られた内容を、確認できた事実、参加者の理解、途中で変わった見方、まだ解決していないこと、次に試すことなどに整理することができる。

ただし、記録は参加者が確認し、必要に応じて修正できるものとする。とくにAIが作成した文章を、そのまま公式な評価や確定的な心理分析として扱わない。

❖ 情報の取り扱いと倫理

MSVでは、原面談やSVなど、個人に関わる情報を扱う。そのためAIを利用するかどうかにかかわらず、記録の利用目的や範囲を明確にし、適切に管理する必要がある。

AIへ情報を入力する場合には、氏名、組織名、地域、連絡先、個人を特定できる経歴、未公開の組織情報などを削除する。音声や逐語記録を外部サービスで扱う場合には、保存場所、二次利用の有無、アクセス権についても確認する。

ICIの公開文書では、人による一次省察を先に行い、その後に匿名化した情報を提示することを推奨している¹⁾。本人自身の振り返りを起点とし、必要に応じてAIによる整理や分析を加えるという順序を基本とする。

第14章 キャリアコンサルティングへの示唆

今回の事例とMSVを通して見えてきたことは、SVやMSVのあり方だけにとどまらない。相談者の経験をどのように受け止め、そこから現実の課題やこれからの選択へどうつないでいくのかという、キャリアコンサルティングそのものにも重要な示唆を与えている。

❖ 傾聴とコンサルティングを分断しない

この事例でBは、Aが怒りや悔しさを安心して話せる関係をつくっていた。そこで次の課題となるのは、その安心を土台に、Aがこれまでの経験を振り返り、事実を確かめ、今後の可能性や選択肢を考えられるよう支援を進めることである。

キャリア支援では、気持ちを丁寧に聴くことと、仕事・組織・制度などの現実的な問題や、今後の選択

について一緒に考えることを切り離しすぎないことが重要である。

気持ちを十分に聴かないまま情報提供や問題解決へ進めば、相談者がその出来事をどのように経験しているのかを置き去りにしてしまう。一方、気持ちを聴くことだけにとどまれば、相談者が自分を取り巻く現実を捉え直し、次の一步を選ぶ機会を逃すこともある。

傾聴はそれ自体で完結するものではなく、相談者が自分の経験を整理し、これからを考えていくための土台になる。

❖ 「正しい問い」より、問いを選ぶ力を育てる

キャリアコンサルティングでは、「どのような質問をすればよいか」に関心が向きやすい。しかし、同じ問いであっても、相談者との関係、タイミング、声の調子、問いかける前のやり取りによって、その届き方は大きく変わる。

したがってSVで扱うべきなのは、質問のフレーズを修正することだけではない。なぜその場でその問いを置いたのか、あるいは置けなかったのか。何を恐れ、何を大切にし、何を守ろうとしていたのか。そこまで振り返ることで、キャリアコンサルタントは状況に応じて問いを選べるようになる。

必要なのは「正しい質問」を覚えることではなく、目の前の相談者との関係の中で、今どのような問いが必要なのかを判断する力である。

❖ 支援者の強みが盲点になることもある

支援者が大切にしている姿勢や得意な関わり方は、支援の重要な資源になる。一方で、その強みが強く働くほど、別の関わり方を選びにくくなることもある。

たとえば、相談者の気持ちを丁寧に受け止めることを大切にしている支援者は、安心して話せる関係をつくることができる。その一方で、関係を損ないたくないという思いから、必要な問いを控えたり、現実的な問題に踏み込むタイミングを逃したりする可能性もある。

SVやMSVでは、強みを否定するのではなく、その強みがどのような場面で支援を助け、どのような場面では別の選択肢を見えにくくするのかを振り返ることが重要である。

❖ 答えを覚えるだけでなく、判断できる力を育てる

実践を学ぶほど、以前より自信がなくなったように感じる時期がある。それは、能力が低下したからではなく、それまで単純に見えていた状況の複雑さや、複数の可能性が見えるようになったためかもしれない。

実際のキャリアコンサルティングでは、一つの正解があるわけではない。十分に聴くのか、問いを進めるのか、情報を提供するのか、もう少し待つのか。その時々相談者の状態や関係、目的、状況を踏まえて判断する必要がある。

SVやMSVが支えるのは、明快な答えを増やすことだけでなく、すぐに答えを決めずに複数の見方を持ち、それでも必要な場面では自分で判断し、その結果を再び振り返る力を育てることにある。

それは、キャリアコンサルタントが経験を重ねながら、専門家として学び続けていくための重要な力である。

第 VI 部 限界・考察・結論

第 15 章 本ケースの限界と課題

本稿では、一つの面談・SV・MSV の実践をもとに、その過程を詳細に検討してきた。具体的なケースを用いて、実際のやり取りや学習の変化を捉えやすくなる記載したが、以下のような制約と課題がある点。

トレーニング場面であること

本事例はトレーニングとして行われたロールプレイであり、実際の相談場面や継続的な支援とは条件が異なる。

参加者同士にはすでに一定の関係があり、互いに学習を目的として参加している。そのため、相談者役が話す内容や、問いを受けたときの安心感、率直に振り返ることのできる程度にも、こうした関係性が影響していたと考えられるため、本ケースで生じた対話や学習が、実際のキャリアコンサルティングや SV でも同じように生じるとは限らない。

相談者役 A の語りの位置づけ

相談者役 A の語りには、ロールプレイとはいえ実際の経験が参照されている可能性があるため、教育・研究上の検討のため、特定の個人や組織について何らかの事実を特定できない複合的なケースへ加工している。よって、本ケースは、あくまでキャリアコンサルティング、SV、MSV の過程を検討するための教育的事例としての位置づけである。

人による MSV も中立ではない

今回の MSV には複数の参加者がおり、D の問い、E の観察、参加者同士の親しさなどが、C や B の振り返りを促す要因となっている。しかし、複数の人が参加することが、必ずしも肯定的な影響だけをもたらすわけではない。進行者の権威性、参加者同士の関係、場の雰囲気などによって、言いにくいことが生じたり、ある見方に同調しやすくなったりする可能性もある。

したがって、人による MSV そのものを中立的なものと考えすることはできない。MSV 進行者も、自分がどのような見立てや価値観を持って問いを置いているのかを振り返り、参加者が異なる見方を表明できる場をつくる必要がある。

AI との比較は限定された条件での検討である

AI による分析は、使用するモデルの性能や設定、与える資料、指示の仕方などによって変化するものであり、また、人による MSV についても、進行者や参加者、関係性によって結果は異なる。

本稿で行った AI との比較は、一つのケース、一つの AI 出力、特定の入力情報と実施条件に基づくものであり、今回の結果から「AI 一般」と「人一般」のどちらが優れているかを結論づけることはできない。本稿で示したのは、あくまでも今回の条件において、それぞれがどのような特徴を示したかという比較である。

数値評価を行っていないこと

本稿では、共感 10 段階や 4 ライン 10 レベルなどを用いた数値評価は行っていない。数値として示されることで客観的で精密な評価に見えても、実際には不十分な情報から導かれた推測が、確定的な評価として受け取られる危険がある。

そのため今回は、数値による判定よりも、逐語記録から確認できる事実、そこから考えられる複数の解釈、本人への確認が必要な点を区別しながら検討する方法を採った。

今後、評価尺度を用いる場合には、判定基準と根拠を明確にし、その評価がどこまで妥当であるかを人が検証できる方法を整えることが課題となる。

第 16 章 考察

この事例では、面談、SV、MSV を連続して検討することで、同じ「相手を守りたい」という思いが、それぞれの場面で異なる形を取りながら現れる様子を捉えることができた。

B の慎重な関わりは、A が怒りや悔しさを安心して話せる関係をつくる一方で、感情が十分に語られた後、次の支援へ進むことを難しくした可能性がある。また、C が B を安心させようとした関わりは、B の自責を和らげる一方で、B が何を怖いと感じ、なぜ踏み込むことをためらったのかを、さらに詳しく聴く機会を少なくした可能性がある。

しかし、これらを単純に欠点として捉え、取り除くことが重要なのではない。相手を守ろうとする姿勢は、B と C の支援を支えている強みでもある。MSV を通して、その強みがどのような場面で働き、どのようなときに別の関わりを難しくするのかに気づくことができれば、「待つ」だけでなく、「尋ねる」「許可を得て別の見方を示す」「短くやり直してみる」といった選択肢を加えることができる。MSV は、これらの関わりを否定するのではなく、状況に応じて関わり方の選択肢を増やす機会になる。

AI による分析では、人が MSV を行う以前に、面談と SV の間に似た関係の動きがある可能性を指摘しており、この点で AI は、複数の記録を比較し、人が見落としている可能性のある視点を抽出することができることを示した。しかし、その見方が本人の経験に合っているのか、問いとして本人にどのように届くのか、さらに対話することで何が新たに生まれるのかは、分析だけでは確かめることができず、人による MSV の対話を通して、当初の見方が確かめられたり、修正されたりする過程が必要であることを示唆している。

人による MSV の特徴は、単に AI とは異なる情報を扱えることにあるのではない。参加者は問いを受けることで、その場で考えたり、迷ったり、新たなことに気づいたりする。その変化をほかの参加者が受け取り、それによって次の問いや対話も変化していく。最初に示された見方は、こうした対話の中で確かめられ、修正され、ときには取り下げられる。

したがって、MSV における「深さ」とは、本人も知らない隠れた心理を外から言い当てることではなく、他者との対話を通して、実践者が自分の経験や関わりを、それまでより多くの角度から捉え、語れるようになることにありと考える。

第 17 章 結論

本ケースでは、ロールプレイ、SV、MSV を連続して行うことによって、面談を行った B の実践が SV で振り返られ、さらに MSV では、その SV を行った C 自身の実践も振り返りの対象となる過程を検討した。

その過程で、B が「十分にできなかった」と捉えていた関わりが、A にとっては安心して話すための支えになっていたことが確認され、B の課題は「感情を十分に受け止められなかったこと」から、「感情を受け止めた後、どのように次の支援へ進むか」へと具体化した。また C も、B を安心させようとした自ら

の関わりがBを支える一方、さらに深い問いを控える方向にも働いた可能性を振り返った。

このようにMSVでは、SVを評価・採点するのではなく、スーパーバイザーが何を見て、何を大切に、なぜその問いや介入を選んだのかを他者との対話に開くことで、自らの実践を捉え直し、次に選べる関わり方を増やしていく。今回、A、B、C、Eそれぞれの経験を重ねることで、それまでの見方が確かめられ、修正され、新たな学びへとつながっていった。

AIは、この過程における記録の整理、複数の見方や問いの提示、学びの記録などを補助することができる。一方、本人の経験を対話によって確かめ、関係の中で生じる変化に応答しながら学びを深めることは、人によるMSVの中心に置かれる。

本ケースから、MSVは「支援者を支える人」をさらに支える仕組みとして位置づけることができる。面談からSVへ、SVからMSVへ、そしてMSVで得た学びを再びSVと面談へ返していく。個々の実践を他者に関き、複数の視点から振り返り、次の実践へつなげるこの循環に、MSVの意義があると考えられる。

第VII部 参考文献・一次資料

- 1) インテグラルキャリア研究所 『メタスーパーヴィジョン (MSV)ースーパーヴィジョン実践を省察するための理論と方法』
- 2) インテグラルキャリア研究所 『キャリアコンサルタントの質向上をめぐる論点整理ーAI時代における対人支援の専門性とICIの実践的視座ー(2.0.0版)』
- 3) インテグラルキャリア研究所 ICI Insights 「技法指導を超えて、実践者の成長へーICIが大切にするMSVの基本的視座ー」
- 4) インテグラルキャリア研究所 「トレーニングとスーパーヴィジョン」
- 5) インテグラルキャリア研究所 Concept Atlas : 「メタスーパーヴィジョン (MSV / Meta Supervision)」

キーワード：メタスーパーヴィジョン (MSV)、スーパーヴィジョン (SV)、キャリアコンサルティング、ナラティブ・リフレクション、ミス・イーランド、AI、専門職育成

付録 1. 三層を見失わないための確認表

第 1 層を扱っているとき

- ・主語は相談者と支援者になっているか。
- ・相談者の経験、支援者の理解、面談関係を検討しているか。
- ・事実と支援者の推測を分けているか。

第 2 層を扱っているとき

- ・主語はスーパーヴァイジーとスーパーヴァイザーになっているか。
- ・スーパーヴァイジーの相談者理解、面談中の体験、介入意図を扱っているか。
- ・スーパーヴァイザーはスーパーヴァイジーの学習をどう支えたか。

第 3 層を扱っているとき

- ・主語がスーパーヴァイザーへ戻っているか。
- ・スーパーヴァイザーが設定した焦点、問い、介入、関係、場の設計を扱っているか。
- ・スーパーヴァイザーの経験、価値観、権威性、専門職像を共同で探究しているか。
- ・原事例の解決会議やスーパーヴァイザーの採点へ戻っていないか。

付録 2. MSV 進行者の問いの例

見立て

- ・この SV で、何が中心課題だと考えましたか。
- ・その見立ては、どの情報と経験から生まれましたか。
- ・別の見立てを採用すると、SV の進め方はどう変わりますか。

問いと介入

- ・その問いによって、スーパーヴァイジーに何が起きることを期待しましたか。
- ・その場で置かなかった問いには、どのような迷いがありましたか。
- ・助言することと待つことの間で、何を判断していましたか。

関係と場

- ・スーパーヴァイジーをどのような人として理解していましたか。
- ・スーパーヴァイジーから、どのようなスーパーヴァイザーとして見られたい気持ちがありましたか。
- ・安心を守ることと、必要な挑戦を置くことをどう調整しましたか。
- ・この SV はスーパーヴァイジーにとって、どのような場として経験されたと思いますか。

発達と次の実践

- ・今回の SV で、自分が守ろうとしていたものは何ですか。
- ・同じ場面へ戻るなら、何を同じように行い、何を選び直しますか。
- ・次の SV で試す最も小さな一歩は何ですか。